

特別広告

2025年日本国際博覧会 (略称「大阪・関西万博」) 概要紹介

■開催期間：2025年4月13日（日）～10月13日（月）

■会場：大阪 夢洲

<開催の意義> P 9 ～13 5頁

<事業構成> P18 1頁

<会場デザインコンセプト> P52～P55 4頁

※本広告は、2025年日本国際博覧会協会の「基本計画」の内容
から抜粋しております。

「基本計画」全体については公式WEBサイトより確認ください。

(<https://www.expo2025.or.jp/>)

開催の意義

いのち輝く未来社会へ

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は世界に大きな影響を与えた。人々は日常の生活の中でいのちに向き合いながら、自らの行動に選択を求められている。

大阪・関西万博は、COVID-19を乗り越えた先の、新たな時代に向けた国家プロジェクトである。この時代に開催される万博として「いのち」という原点に立ち戻り、自らと他者のいのちを意識し、そして自然界の中で生かされる様々ないのちに向き合い、世界が持続する未来を模索する場となる。

転換期ともなるこの時代において、万博という場で世界が一つとなることに意義があり、いのち輝く未来社会のありようを共有することは2025年以後の世界の新たな一歩となる。

SDGs 達成・SDGs+beyond への飛躍の機会

「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマの下で行われる一連の活動は、「誰一人取り残さない」という誓いに裏打ちされた持続可能な方法で、多様性と包摂性のある社会を実現することを究極の目的とする、国際連合(国連)のSDGsと合致するものである。

大阪・関西万博が開催される2025年は、SDGsの目標年である2030年の5年前であり、SDGs達成に向けたこれまでの進捗状況を確認し、その達成に向けた取組を加速させる絶好の機会となる。同時に、中長期的な視野を持って未来社会を考えることを通じて、2030年のSDGs達成にとどまらず、その先(+beyond)に向けた姿が示されることも期待される。

2025年に日本において大阪・関西万博を開催することは、SDGs達成・SDGs+beyondへの飛躍の機会となる。

Society5.0実現に向けた実証の機会

日本国政府はSociety5.0を国の成長戦略として位置づけており、官民を挙げて、その実現に向けて取り組んでいる。Society5.0とは、日本の強みとリソースを最大限に活用して、誰もが活躍でき、人口減少、高齢化、エネルギー・環境制約等、様々な社会課題を解決できる、日本ならではの持続可能でインクルーシブな社会経済システムをいう。具体的には、IoT(モノのインターネット)²、AI(人工知能)、ロボティクス、ビッグデータ等の先端技術を活用して様々な世界的な課題を解決する超スマート社会の実現を目指す日本の国家的な取組である。

大阪・関西万博において、会場全体を未来社会を先取りした超スマート会場とし、新たな技術、サービス及びシステムの社会実装に向けたチャレンジを行うことは、Society5.0実現に向けた実証の機会となる。

2 Internet of Thingsの略。機器が通信機能を備え、インターネット等のネットワークに接続して動作する仕組み。

日本の飛躍の契機に

大阪・関西万博を契機として、世界の多様な文化、価値観が交流しあい、新たなつながり、創造が促進されていく。また、本万博は文化、歴史等も含め、日本の魅力を再発見する機会ともなり、「観光立国」を目指して、より付加価値の高い観光の実現を目指すきっかけとなる。さらには、万博会場において、DX(デジタルトランスフォーメーション)³による社会変革の新たな形や、地球環境問題への新たな挑戦の形を世界に示していく。本万博は、経済、社会、文化等あらゆる面において、大阪・関西のみならず、日本全体にとって更なる飛躍の契機となる。

大阪・関西の特徴

大阪・関西地域は、古代国家の基礎が築かれた地であり、世界遺産、国宝、重要文化財等の歴史観光資源が多く残り、神社仏閣、歴史的建造物、伝統芸能、和食等の幅広い文化資源を有する地域である。

さらに、ユネスコ無形文化遺産である人形浄瑠璃文楽や、上方歌舞伎、能といった伝統芸能、上方落語や漫才といった大衆演芸をはじめとした「笑い」のエリアとして日本中に知られている。

また、大阪は江戸時代より天下の台所として知られ、「食いだおれ」の町とも言われるほど様々な食が発達している。野球やサッカーをはじめとしたスポーツも大阪・関西地域を代表する特徴である。

産業の特徴をみると、関西は、環境・ライフサイエンス・ものづくりの企業・研究施設、伝統工芸品と匠の技等、幅広い分野の集積があり、Society5.0につながる高い技術等、最先端の技術力で日本を牽引する地域である。また、世界初の先物取引等、世の中になく、新しいものをつくりだそうという気持ちが強い地域である。

世界・アジアとのつながりをみると、国際貿易拠点として、大量の貨物の取扱いや大型クルーズ船が入港できる空港・港湾により、アジアの中核としての役割を担っている。地形は、山間部から平野部まで変化に富み、日本特有の四季折々の豊かな自然に恵まれている。こうした自然や文化・歴史により、国内はもとより、外国人観光客にとっても、大阪・関西地域は東京と並ぶゴールデンルートとして人気の旅行先になっている。

このように大阪・関西地域は、それぞれの地域の歴史、文化、伝統及び気風を背景に、個性的且つ多様でありつつ、確かな技をベースに発展してきており、日本の経済・産業・文化にとっての重要な地域となっている。

³ Digital Transformationの略。将来の成長等のために、新たなデジタル技術を活用して新たなビジネスモデルを創出・柔軟に改変すること。

テーマ

「いのち輝く未来社会のデザイン」 (Designing Future Society for Our Lives)

「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマは、人間一人一人が、自らの望む生き方を考え、それぞれの可能性を最大限に発揮できるようにするとともに、こうした生き方を支える持続可能な社会を、国際社会が共創していくことを推し進めるものである。

言い換えれば、大阪・関西万博は、格差や対立の拡大といった新たな社会課題や、AIやバイオテクノロジー等の科学技術の発展、その結果としての長寿命化といった変化に直面する中で、参加者一人一人に対し、自らにとって「幸福な生き方とは何か」を正面から問う、初めての万博になる。

近年、人々の価値観や生き方がますます多様化するとともに、技術革新によって誰もがこれまで想像しえなかった量の情報にアクセスし、やりとりを行うことが可能となった。このような進展を踏まえ、大阪・関西万博では、健康・医療をはじめ、カーボンニュートラル⁴やデジタル化といった取組を体現していくとともに、世界の叡智とベストプラクティスを大阪・関西地域に集約し、多様な価値観を踏まえた上での諸課題の解決策を提示していく。

4 社会の構成員が、自らの責任と定めることが一般に合理的と認められる範囲の温室効果ガスの排出量を認識し、主体的にこれを削減する努力を行うとともに、削減が困難な部分の排出量について、クレジットを購入すること又はほかの場所で排出削減・吸収を実現するプロジェクトや活動を実施すること等により、その排出量の全部を埋め合わせた状態をいう。

サブテーマ

大阪・関西万博のテーマである「いのち」を考える軸として、我々は、「Saving Lives(いのちを救う)」、「Empowering Lives(いのちに力を与える)」、「Connecting Lives(いのちをつなぐ)」という3つのサブテーマを設定する。

なお、サブテーマにおける“Lives”は「生活(daily life)」や「人生(life as a whole)」の意味だけではなく、とりわけ「いのち・命(life)」に着目した概念である。

日本では「生きとし生けるもの」のみならず「路傍の石」でさえも「いのち」が宿ると捉える文化が古くから存在する。こうした背景から、テーマである「いのち」の対象を人間だけではなく、我々を取り巻く多様な生物や自然、さらにはより広く捉える。

Saving Lives(いのちを救う)

「Saving Lives(いのちを救う)」は、「いのち」を守る、救うことに焦点を当てるものである。「いのちを救う」から想定される具体的なキーワードとしては、例えば、公衆衛生の改善による感染症対策、防災・減災の取組による安全の確保、自然との共生等が挙げられる。

Empowering Lives(いのちに力を与える)

「Empowering Lives(いのちに力を与える)」は、「生活」を豊かにする、可能性を広げることに焦点を当てるものである。「いのちに力を与える」から想定される具体的なキーワードとしては、例えば、情報通信技術(ICT)を活用した質の高い遠隔教育の提供、スポーツや食を通じた健康寿命の延伸、AIやロボティクスの活用による人間の可能性の拡張等が挙げられる。

Connecting Lives(いのちをつなぐ)

「Connecting Lives(いのちをつなぐ)」は、一人一人がつながり、コミュニティを形成する、社会を豊かにすることに焦点を当てるものである。「いのちをつなぐ」から想定される具体的なキーワードとしては、例えば、パートナーシップ・共創の力、ICTによるコミュニケーションの進化、データ社会の在り方等が挙げられる。

コンセプト

People's Living Lab(未来社会の実験場)

大阪・関西万博のコンセプトは「People's Living Lab(未来社会の実験場)」である。これは、テーマを実現するアプローチであり、万博のスタイルをより実践的な行動の場へと進化させることを狙うため、本万博で行われる事業のガイドラインの役割を果たす。本万博の会期前から多様な参加者がそれぞれの立場からの取組(例えば、健康・医療、カーボンニュートラル、デジタルをテーマにしたもの等)を持ち寄り、SDGs達成に資するチャレンジを会場内外で行い、未来社会をただ考えるだけでなく、行動することによってリアルに描き出そうという試みが、本万博の最大の特徴と言える。万博会場を新たな技術やシステムを実証する場と位置づけ、多様なプレイヤーによるイノベーションを誘発し、それらを社会実装していくための巨大な装置としていく。

会場

ゆめしま 夢洲(大阪市臨海部)

大阪・関西万博の会場は、夢洲である。夢洲は、大阪市内の臨海部に位置する人工島であり、来場者は瀬戸内海の美しい景観に接することができる。世界とつながる海と空に囲まれた万博として、ロケーションを活かした企画や発信を行っていく。

会場面積は155haで、会場中心部にパビリオンエリアを設け、南側には水面、西側には緑地を配置した会場とする。



2.1 事業構成

大阪・関西万博では、万博の目的であるテーマの実現に向けて、People's Living Lab(未来社会の実験場)というコンセプトのもと、「世界との共創」「テーマ実践」「未来社会ショーケース」の3つを実施する。本万博で行う全ての事業は、テーマを実現するための手段として明確な役割を持つものであり、目標の達成を通して万博の開催意義に貢献するものである。

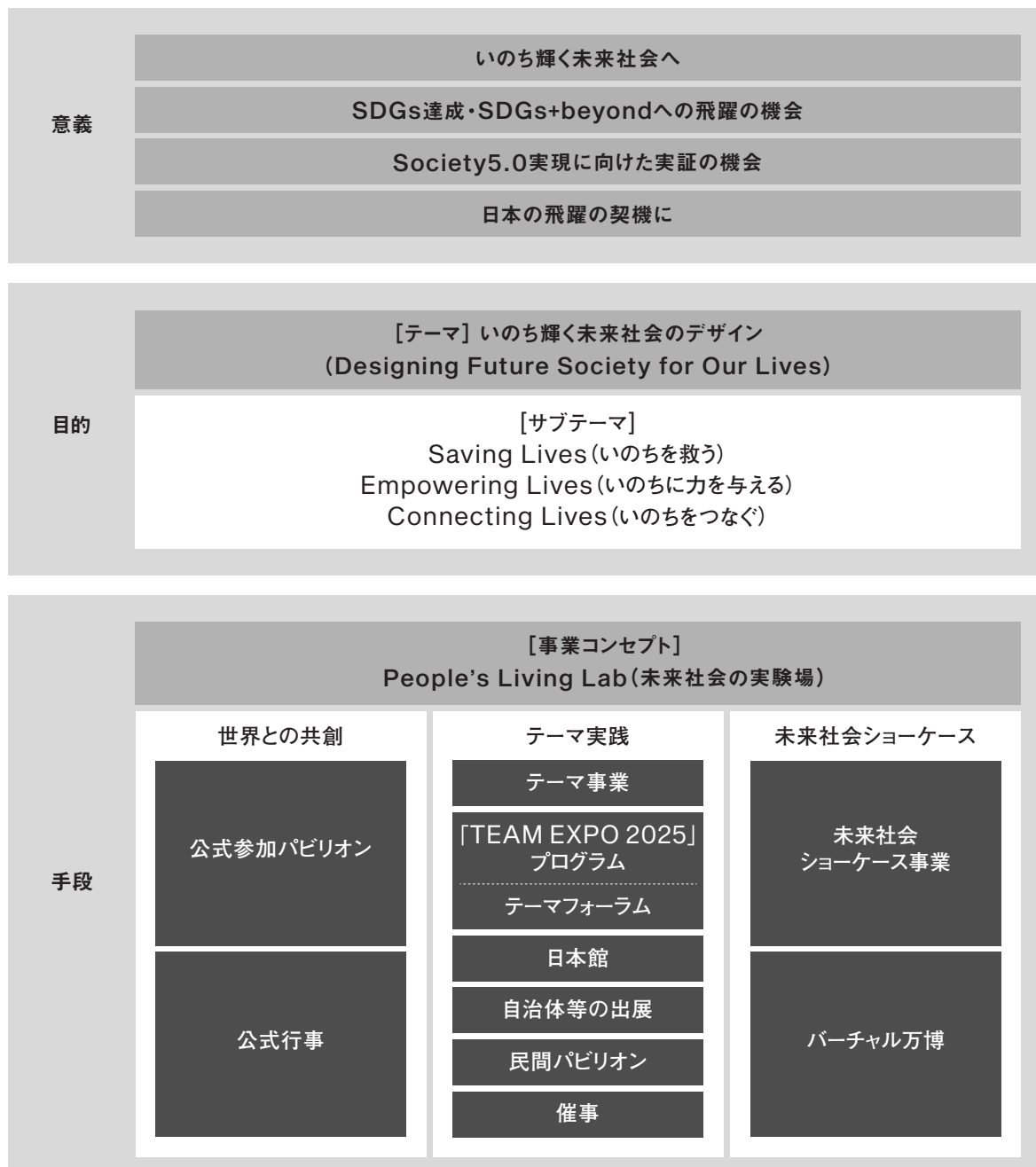


図 大阪・関西万博の事業構成

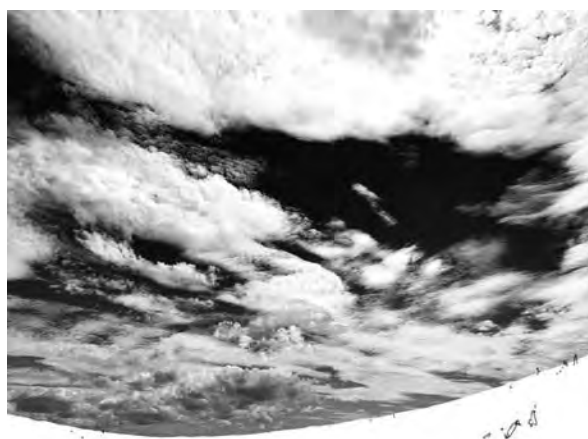
5.1 会場デザインコンセプト

多様でありながら、ひとつ

現代は多様性の時代である。同時にそれは、残念なことに分断の時代となる危険をはらんでいる。世界各地の様々な文化やライフスタイルが一箇所に集まるこの万博という場において、豊かな多様性を称賛すると同時に、分断を超えた繋がりを体験することができれば、それは未来への希望となるだろう。この会場デザインは、誘致のコンセプトから引き継ぐ「非中心・離散」の理念によって多様性を鼓舞し、そこに「つながり」を重ね合わせる。多様であり同時に一つであること。無数の異なるものたちが一つの世界を共有しているという感覚を来場者が体感することができるような場を目指すこととする。

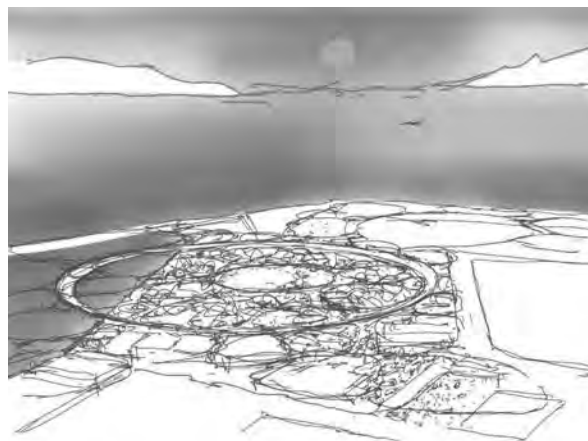
ひとつの空

その「つながり」を象徴するものとして
「ひとつの空」を提示したい。
この空は、世界中が見上げている空である。
一つの空が世界をつなぐ。
世界の人々が一つのものを共有している。
多様でありながら、ひとつである。
そんな「ひとつの空」をこの万博会場に据える。



海と空と地の万博

夢洲は海に囲まれた万博会場である。
海の一部を囲いとして会場デザインに取り込む。
来場者が見上げるひとつの空を切り取る。
そして地上では様々なパビリオンが様々な自然と共に
「非中心・離散」に点在する。



明快な動線と多様な場を 「非中心・離散」で配置する

会場全体を巡る主動線は、
わかりやすく、同時に様々な情景が生まれるように
円環状にデザインしている。
主動線に沿って様々な大きさの広場が点在し、
体験の抑揚が生まれる。
広場ではイベント等のにぎわいが企画される。





